

が対立して調制が出来なかつたのであらうか。

最後に思う事は今大分県史料編纂中で、大分市大分郡の部分も近く出る筈である。其中には新発見の史料が少くない。之がも少し早く出て活用出来たならば大分市史は一層完璧なものになつたであらう。然し之は止むを得ない事であつた。

以上私は敢て妄評を加えたものゝ、それは大分市史の内容的価値を毫も損するものではない。多くある市史の中でも断然光つて居るものである事を断言する。只数日の中に批評を書けとの無理な御注文で、恣大な市史を読む暇は無かつたので見当違いの言もあつた事と思うが諒とせられたい。

(本会顧問、大分県史料刊行会監修委員、文学博士)

大分県史料第十卷

西国東 東国東 速見一 諸家文書

大分大学教授 渡辺澄夫

県史料刊行会では、清原博士、竹内九大教授の監修の下、各委員の努力により国東、速見諸家文書、別府・大分諸家文書、永弘文書二の三冊を印刷中であつたが、このほど国東

、速見諸家文書が完成し、豊富な内容とぎん新、精密な編さん法が学界の注目を浴びてゐる。

本巻に收められたものは四十四家八百四十五点でその範圍は西国東、東国東兩郡と速見郡の一部杵築市を含み、大体地理的に見て国東半島部一帯といつてよい。この地方は古くは宇佐八幡の勢力圏に属し、同宮の神宮寺である弥勒寺の所領が多く、杵築市もかつては八坂上庄、下庄といわれ、やはり弥勒寺領で、これも広く半島の宇佐文化圏に含まれる。国東地方の寺院を六郷満山と総称するのは同地方が律令時代に六郷から成つていたからで、これがすべて弥勒寺領であることから、宇佐との密接な關係を知り得よう。

国東地方に八幡宮の多いのも宇佐との所領關係からで、こうした国東文化の基調をなす古社寺の文書は富貴寺、瑠璃光寺、櫻八幡(興満文書)椿八幡(安見文書)などのそれが收められている。既刊の永弘文書、小山西文書は以上の末寺、末社や所領荘園に関する支配者(領家)側の史料であるが、本巻はその現地側のもので、この兩者をつき合せて見ることによつてはじめて同地方に古文化の発

展した原因がわかり、また複雑な荘園内部の情況や地領主層の動向およびこれらと宇佐との關係が解明されるのであつて、本文書を除外して国東の歴史を語り、宇佐の荘園をうんぬんすることは、ほとんど不可能に近いといつても過言ではない。

本巻中の庄巻は何といつても杵築入江文書六卷百五十五通と系図一卷である。これは正しくは大友田原家文書といふべきもので、同氏の滅亡後末流入江家に伝つたものである。田原氏は大友能直の庶子泰広が田原村に領地を与えられ、その子孫が国東地方に勢威を張つたもので、南北朝時代に現国東町の飯塚城に居を移した。氏能の時代が最盛期で大友惣領家をしのぐ状態となり、天皇のりん旨や足利尊氏以下の文書が多い。尊氏が元弘以来の戦没者の霊を弔うため国毎に建てた安国寺が特に国東郷に置かれたのはこのためである。国東地方の諸他の文書はほとんど田原氏や大友氏と關係があるのであつて、現在学界の中心テーマとなつて居る在地領主制の形成や、守護から守護大名、戦国大名への進化過程を研究する上にこの田原氏や大友氏の場合が最もよい事例であり、そうした点本書のもの

つ意義は極めて大きい。興味ある一、二の文書を拾えば長谷雄文書に田原紹忍の養子親虎が南蛮宗に執心したため紹忍から「各別」(禁錮)されたことが見える。岐部文書に遺明船の中乗と船頭がケンカをしたため、大友義長が浦部衆に命じて停止させている事実がある。なお後者に八月節句に鉄が贈答されているのは、今日の砂鉄採取とも関連し、戦国時代の火器の普及や集団戦法と考えさせておくる興味深いものがある。

本書の最大の特徴は、主要人物の花押印章の編年を行つたことである。もちろん研究途上のもののであるが、これほど精密なものは全国的に例のない画期的な企てで、今後わが国の史料編さん事業の進むべき方向を決定するものである。

しかし本書にも全く欠点がないわけではない。花押印章編年一覽に、大友宗麟のローマ字印章や義統の花押、田原親家の黒印の洩れているのは惜しい。本文のはじめの方に花押番号をつけないのは、不統一の感は免れない。本文の文書名の食い違いも目立つ(もつともこれは目次で統一訂正したものである)。口絵写真と本文を対照しても若干の誤があ

り、年代比定にも疑問のあるもあり、また誤植もないとはいえない。しかしこれらは魯魚の誤であつて、本書の価値を減ずるものではない。(A5版、頒価九七五円送料荷送費九五円)

八幡一郎
賀川光夫 著 早水台

国東半島の一角を占める縄文式早期の押型文土器の大遺跡である、速見郡日出町の東方もと川崎村大字西小深江の早水台に就て、著者が、昭和廿八年の七月と十一月の二回に互り調査の結果を県教育委員会に報告したものを、同委員会が、大分県文化財調査報告書才三輯として出版したもので、才一章序説に筆を起し、二、地理学上より見たる早水台、三、遺跡の状況(三節)、四、集落址(二節)、五、土器―遺物一(四節)、六、B類土器雜論―遺物二(五節)、七、石器―遺物三(二節)、八、早水台遺跡調査總括附録(一)、大分県下押型文土器出土遺跡の調査(二節)、附録(二)、大分県に於ける押型土器出土地名表、に分けて細論し、附するに図版十九葉、挿図百四を以てし、此の種研究物としては単に本県のみならず、広く

学界に寄与する所大なるものがあると思う。尚県では一般希望者のために印刷所府市森沢商店より上製本とし頒価壹千弍百円で配分させている。希望者は同印刷所又は著者賀川氏に申込みばよい。

昭和三〇、六、大分県教育委員会刊洋並製
B五判一九四頁非売 (立川)

田北学編 続大友史料 二

本書は前号渡辺氏が紹介した「続大友史料一」の続編で、豊前国旧宇佐、下毛二郡と、豊後国旧速見、大分二郡の旧家四十三家の文書が収載されている。内容の主なるものは、宇佐郡内の渡辺氏、元重氏文書と系図、下毛郡成恒氏、蛸瀬(かきせ)氏文書、速見郡長野氏、城内氏、大分郡では杵原八幡関係文書及び一万田氏文書等である。中には城内、日名子、杵原八幡、宮師文書等の如く、原本はすでに散佚し無くなつているものもあり、又蛸瀬や一万田文書の如く、原本は已に他府県に移つているものも載せられ、巻末には前巻同様十一頁に亘り、後学の者には一種の辞典用ともなる原寸大の花押や印判が載せられてある。なお本文の随所に傍註が加えてあり、年号の無い